

柏崎刈羽原発は社長を面接して合格

はじめに

原子力規制委員会は、去る9月13日の審査会合で、柏崎刈羽原発の再稼働是非の議論をしたが、新規制基準適合性審査のかなめとなる東電組織の運転適格性が焦点となった。結果として、東電の小早川社長が田中委員長との面接で述べた「経済性を優先して安全をおろそかにしない」という言葉を原発の保安規定に書き込むことを条件に適格性が認められた。技術力については、「原発を的確に運転する能力がないとする理由はないと判断した」とされた。これにより、適合性審査合格の見通しができた。

この審査実務が行われている間、7月10日に、田中委員長が東電の川村会長や小早川社長を呼んで、東電の姿勢を確かめるための議論を行っていることが報じられていた¹。そして、8月25日に同社長が、原発の安全管理と福島第一原発の廃炉方針について規制委員会に文書で回答していた²。

しかし、この一連の経緯を伝える新聞報道には違和感を覚えながら、田中委員長が厳しい姿勢を示すことによって、側面から東電の新経営者に圧力をかけ、本筋の規制基準に係る申請手続きを厳正に行っているものと受け取っていた。ところが、この側面活動と思いついていた動きそのものが審査会合に連動するメインテーマであったと知って、私は認識の転倒を余儀なくされた。

「えっ、社長と会長に面接したら、その組織の原発安全管理能力が分かるの？」
という驚きである。

1. 組織のリーダーの信頼性

組織のリーダーの信頼性は、面接するだけで分るものであろうか。近い例では、東芝の社長や会長が部下に粉飾決算を命じて、その真相が1年以上の間、表に出なかった(2015年4月から2016年4月まで。第三者委員会を作って内部調査を行ったけれども、この委員会は真相隠蔽に利用されさえした)³。

東京電力では2002年に、1986年から2001年にかけて、原発検査における29件のトラブルの記録を改ざん・隠ぺいしていたと南直哉社長(当時)が発表し、歴代の社長経験者が責任を取ってそれぞれの役職を辞任した⁴。このトラブル隠しは、当時の原子力安全・

¹ 「東電の安全姿勢 見極め」『朝日新聞』2017年9月7日、ほか

² 「東電の安全姿勢注視」『朝日新聞』2017年9月14日

³ たとえば、大西康之『東芝原子力敗戦』文芸春秋、2017年

⁴ 原子力資料情報室『検証東電原発トラブル隠し』岩波ブックレット、2002年、p.2

保安院も加担しており、内部告発したケイ・スガオカ氏の手紙をそっくり東電に渡すという一心団体ぶりであった。また、福島第一原発の津波予測では、2008年に15.7mの津波到来が予測されたが、経営者たちはその対策を怠った。

誰でも、組織に所属して一定の役割を果たそうとすれば、90%の真実と10%の嘘（妥協・黙認・意に反する服従も含めて）とで生きている。全員が妥協を排してかたくなな態度をとれば、組織は成り立たない。また、あまりに迎合して全員一色になると、その組織はいずれ暴走して破滅する（近い例は上記の東芝。第2次大戦中の日本も同様）。東電の社長や経営者が、今は真実を誓っても、組織人として振舞うことは当然である。面接して、あるいは包括的な文書を提出させて、それで安全な運転を保証してもらった、と認識するのは間違っている。

2. 面接という手法

筆者が違和感を覚えるのは、おそらく西欧やイスラム圏の契約社会では面接での約束だけで相手を信用するという手続きはあり得ないと思うからである。人格的な約束が成立するのは神と人との間だけであって、人と人との間は50-50の権利を持つ対等の人間関係である。そのことは規制機関と事業者の間でも同じである。紙に書いて双方が対等にサインして初めて約束が成立するのであって、規制当局が事業者に誓約書の類を提出させたことで法律的な義務を課したということにはならない。

また、規制委員会の田中委員長に、閻魔大王のような透視能力があって将来の忠誠をも確保した、と見なすのは幻想である。

3. 原発プラントの安全についての認識

今、北朝鮮のミサイルが日本上空をにぎわしている。その破壊力がどれほどかはつまびらかではないが、武器の場合にはその最大性能が相手側の脅威になる。たとえば、10発のうち9発が不発であっても、1発が命中したときの最大被害の予想が、相手側の対策の基準になる。したがって、原爆という武器の品質管理は成功率10分の1でも十分目的を達する。

一方、原発プラントの過酷事故による災害規模は、一国の半分を失うほどの巨大なものであるから、その発生確率を、既存の原発については1万分の1、新設の原発については10万分の1という確率で設計・建設・運転管理するように求められている。

しかし、人間技ではこれは不可能だと断言してよい。いくら努力して設備を立派に作っても、不可抗力な要素がある。第一に人為ミスがある。人間のポカミスは無くすることができない。これは人間の宿命である。第二に、外部からの攻撃がある。弾頭が原爆や水爆でなくても、1トンほどのTNT火薬を弾頭に取り付けたミサイルを原発直上から落とせば、過酷事故は容易に発生する。そして、1万年間隣国からの攻撃が皆無となるほど立派な善隣友好外交の維持はむずかしい。人間はそれほど立派にできていない。実はこれを書

いている9月15日も、朝からJ-アラートがにぎやかであり、新幹線や通勤電車を止めたくらいだから、1年間さえも怪しい。

4. 規制委員会の手詰まり

原子力規制当局は、原発建設初期には、事故発生の確率を「イベントツリー」⁵（下図）によって計算して見せて、その確率がきわめて低いから「起きないのと同様だ」として、原発建設推進に協力してきた。

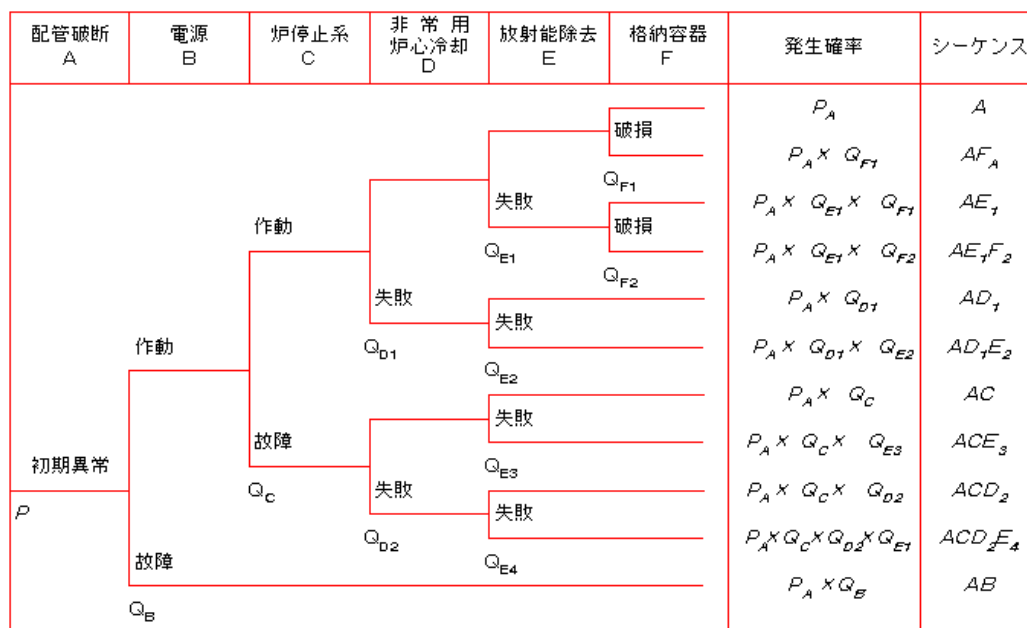


図2 原子炉冷却材配管破断異常に関するイベントツリー

【出典】近藤 駿介:原子力の安全性、同文書院(1990年)、p. 196

しかし、現実に約半世紀の間に5基の原発が過酷事故を起こして、その確率計算の信頼性は失墜してしまった。このことは1万年に1回などの確率で表示する「安全目標」が失墜したともいえる。その手詰まりに代わる依り代として、人間の善意に期待する「信義誠実の原則（信義則）」を持ち出してきたのではないだろうか。

「規制委員長と社長が約束したから安全だ」と言われても、新たな「安全神話」にか聞こえない。

⁵ ATOMICA 06-01-01-15 「確率的安全評価に関する研究」

<http://www.rist.or.jp/atomica/data/pict/06/06010115/03.gif>